

## 藤井裕久 民主党顧問

一九三二年（昭和七年）六月二四日生まれ

一九三九年三月、東京女子高等師範学校附属幼稚園卒園

一九四五年三月、東京女子高等師範学校附属国民学校卒業

一九四八年三月、東京高等師範学校附属中学校卒業（特別科学学級在籍）

一九五一年三月、東京教育大学附属高等学校卒業

一九五五年三月東京大学法学部卒業。四月に大蔵省入省

一九七七年、第一一回参議院議員通常選挙（全国区・自由民主党公認）当選

一九八三年、第一三回参議院議員通常選挙（比例区・自民党公認）二期目当選

一九八六年、第三八回衆議院議員総選挙（旧神奈川三区・自民党公認）落選

一九九〇年、第三九回衆議院議員総選挙（旧神奈川三区・自民党公認）当選

一九九三年

自民党離党、新生党結成

第四〇回衆議院議員総選挙（旧神奈川三区・新生党公認）再選

大蔵大臣（細川内閣）就任

一九九四年

大蔵大臣（羽田内閣）留任

- 一 二月一〇日、新生党解散、新進党結成に参加
- 一 一九九六年、第四一回衆議院議員総選挙（神奈川一四区・新進党公認）三選
- 一 一九九七年、新進党分党（二月三一日）
- 一 一九九八年
  - 自由党結成（一月六日）
  - 政策調査会長就任
- 二 二〇〇〇年、第四二回衆議院議員総選挙（神奈川一四区・自由党公認）四選
- 二 二〇〇三年
  - 自由党解散、民主党合流
- 二 二〇〇四年
  - 第四三回衆議院議員総選挙（神奈川一四区・民主党公認）五選
- 二 二〇〇四年
  - 党幹事長就任
  - 党代表代行就任
- 二 二〇〇五年
  - 第四四回衆議院議員総選挙（神奈川一四区・民主党公認）落選、政界引退を表明
- 二 二〇〇七年
  - 長浜博行衆議院議員が第二一回参議院議員通常選挙に出馬し自動失職したため、繰上当選

により六選

党最高顧問就任

二〇〇九年

第四五回衆議院議員総選挙（比例南関東ブロック・民主党公認）七選

第一二代財務大臣（鳩山由紀夫内閣）に就任

二〇一〇年・第一二代財務大臣を退任

二〇一一年

内閣官房副長官（菅内閣（第二次改造））に就任

内閣官房副長官（菅内閣（第二次改造））を退任し、

内閣総理大臣補佐官（社会保障・税一体改革及び

省庁間調整担当）に就任

党最高顧問、党税制調査会長就任

二〇一四・三・二六

藤井民主党近現代史研究会座長

講師の三谷太一郎東大名誉教授と



\* 民主党近現代史研究会を主宰して

「戦争のない社会を守りつづける政治・歴史に学ぶ政治」

藤井裕久 民主党顧問に聞く 一〇〇三

一

二〇一二年一〇月四日（木）

衆議院第一議員会館九一九室にて

聞き手

尾崎美千生 元毎日新聞政治部副部長 高連協参与

堀内正範 朝日新聞社社友 「月刊文風」編集人

### 解散直前、野田総理を支える

新世紀このかた一〇年余、手つかずのままといつていい「日本高齢社会」構想を論ずるにあたって、お会いすべき必要のある方々はだれかが話題になった。二〇〇九年七月、ジャーナリスト仲間の会でのこと。

その立場にある方々というのは、政治家、官僚、経済人、学者、マスコミ関係者、そし

て先駆的な活動者の方々で、政治家としてまず挙がったのが藤井（裕久）さんだった。政治の側での「尋根求底」のためには一九八〇年代まで遡らねばならず、そこまで遠く経歴をたずねるとなると、七〇歳より前の人には求められなかったからである。

二〇〇九年八月三〇日に「総選挙」があつて、民主党が大勝して政権交代があつたあと、藤井さんは「渦中の人」でありつづけた。マニフェストに「官僚主導から政治（国民）主導へ」「コンクリートから人へ」を掲げて政権についた民主党に、「人Ⅱ高齢者」に関する「ライフ・イノベーション」を期待しつつ、お会いする必要があるながら三年を待つこととなった。

その間に藤井さんは、五〇歳代の野田（佳彦）首相がぶれないよう支えつづけて、二〇一二年六月に衆議院、八月に参議院で「消費税増税」法案の採択にこぎつけ、国際的には日本政治への信頼を確保することとなった。財政上のひと仕事は終えたものの、あとの経済をどうするかは課題に、高齢者の持つ潜在力が関わることに明解な回答をしてくれるであらうという期待を持つてお会いした。

一〇月四日（木）の午後、尾崎美千生・元毎日新聞政治部副部長の驥尾に付して、衆議院議員会館にお訪ねした。世紀をまたいで政界の経緯を熟知しておられる八〇歳の藤井最高顧問と「産婆術」を心得た政治記者である尾崎氏の示唆に富む時局対話がしばらくつづいた。わたしはそこに織り込むようにして、「日本長寿社会（超高齢社会）」のありように

ついでに積年の憂慮を伝え、ご意見を聞いた。

「近いうち（野田発言）」解散の時期、見定めづらい「維新の会」の力、第三党はどこか、野田総理のぶれない戦略と人を見る目、組閣の顔ぶれと身体検査のこと、田中真紀子論、臨時国会、赤字国債へと話題は次ぎ次ぎに展開したが、ここはその場ではないので政局へのご意見は省略させていただいて。

## 高齢化・高齢社会について

### 「消費税」を高齢者福祉の完全目的税に

尾崎…わが国の「高齢化」についてのお話をうかがいたい。

藤井…まずは「消費税」の「高齢者三経費」（高齢者介護・高齢者医療・年金）としての完全目的税ですね。小渕（恵三）内閣のときに完全目的税にしました。当時の自由党をリードした考えは、この社会を建て直した人はいつたいたいだれなんだ。若い人は恩恵を受けているだけではないか。もっといえば「赤紙」をもらった人が戦後がんばった。この人たちの晩年に報いるために「高齢者三経費」として目的税にして、それ以外に使えないようにした。宮沢（喜一）大蔵大臣は他党の提案だけれどもわかってくれて、自民党には完全目的税という発想まではないけれどもいつて、予算総則に「高齢者三経費」にしか使えないと書いてくれた。完全目的税というのは会計的に目的税だから一般会計にいれない。その

ときに広げて、子育てを加えて四経費になった。もうひとつ高齢者医療だけでなく一般医療にしたので医療保険にも使えるようになっていいる。

### 今度の「消費税」案は与謝野氏の功績

藤井…今度の「消費税」案は、政権交代の前に自公がつくった。福田（康夫）・麻生（太郎）内閣のとき、自民党で与謝野（馨）がリードした案だけれど、全うな人がつくったものだから勉強しろと言った。民主党になって菅（直人）さんの最大の功績は与謝野を引っ張ってきたこと。与謝野の功績というのはふたつ。会長としてマスコミによく説明して納得させたこと。三・一一（東日本大震災）のあと「こんな時に増税か」という声のなかで静かにやっていた。六月末までの三カ月でできたのは与謝野の功績です。すぐ横にいて彼を助けましたよ。東大野球部の仲間だから。

### 全国民の負担がいい

堀内…野田（佳彦）さんからは見えない、五〇歳代からは見えない高齢者の姿がある。高齢者を騎馬戦や肩車をする姿で負担を説明するが、上に乗っているのはお年寄りじゃない。多くの高齢者はいま「支える側」にいる。三〇〇〇万人のうち八〇％がそう。いろいろ支えている。

藤井…若い人は年金をもらえなくなるといわれてそう思っているようだが、日本国家の破産ですからそれはありえない。対応は三つある。一つは借金。南ヨーロッパだよというところ。二番目は保険料。会社員、役人、自営業になれば実感する。三つ目は若い人ばかりではなく国民が薄く負担する。そして君らの年金を安定化する。デイスカッションさせるとまず一〇〇%が消費税。じいさんでもばあさんでも消費することで国民が負担する。若い人だけが支えるわけではありません。だからわたしはあれ（肩車）をいったことありませんよ。野田さんもやめた。

### 「高齢者雇用安定法」が成立

尾崎…三〇〇〇万人にもなった高齢者をもっと使おうという姿勢が野田内閣から出てこない。

藤井…ありますよ。「高齢者雇用安定法」なんかがそう。「高齢者雇用安定法」は、六五歳まで働けるようにした。年金をもらえる年齢とむすびついていますが。いずれは六七、六八歳までになる。日銀ではなくて、資産の一五〇〇兆円を活かすのがいい。おれおれ詐欺で一〇〇〇万もやられる。まっとうな消費に使えばいい。働ける人まで働かせないようにしていることが問題です。

堀内…「高齢社会」の形成の問題を一九九九年の「国際高齢者年」以来みていますが、元気



な高齢者がどんどん増えているのにやることをつくれなかった。だから知識も技術も資産も滞ってしまっている。これは政治家の構想の欠如ではないですか。政治ですよね。

藤井…政治です。六五歳までを会社と労働組合と雇用者で決めてきたけれどもそうではなく、能力のある人はかならず働いてもらうしくみにする。「高齢者雇用安定法」ができたが、まだ六五歳まで。ぼくら八〇歳でもやりますよ。

### 高齢者の政治代表が少ない

尾崎…それで政治家でいうと、小泉（純一郎）さんのときに中曽根（康弘）さんと宮沢さんにやめてもらったりしたのだけれど、二四%の人が六五歳以上になっているのだから、高齢者の代表はもつとあっている。

藤井…それいうとまたやれといわれるから。

尾崎…やりたくないというのならそうはいえないけれど。政治家もそれなりの人はやってもらったらい。

堀内…藤井さん、岸（恵子）さん、樋口（恵子）さん、堂本（暁子）さん、石原（慎太郎）さん。みんな同じ年の八〇歳。

藤井…石原が新党つくるといつているが、むずかしい。八〇歳になるとクリエートする力はない。知恵はある。学生るとき石原はサッカーで、わたしは野球。わたしとどっちが元

気かわからないが、知恵はあります。クリエートはできない。仕事も土木はできないが、知恵は大事ですよ。一生懸命やりますよ。

### 世代交代だけが進む

堀内…ここ一〇年をみていまして、単純に世代交代が進みすぎて社会経済のパイがどんどん小さくなっている。パイの外に優れた技術や知識がある人がたくさんいるのに使っていない。外国からみたら日本社会は違うんじゃないか。ひよつとすると成功例にならない。

藤井…日本は高齢化率が高い。高齢者を面倒をみてもらう対象にしてしまうのがいけない。消費税をみんなが負担するのがいいといったけれど、それだけでなく社会に貢献もできる、両方なんですよ。

堀内…古い「男の美学」が生きている。仕事が終わったら隠居。

藤井…まだ日本の社会にはそれがあります。じじいが出てくるのはなんだという。

尾崎…先生は八〇でご隠居やりたいのですか。

藤井…やりませんよ。裏でやります。野中（広務）さんも八六歳かでしょ、裏の仕事です。小沢（一郎）さんに頼まれたことがあります。中年まではわたしのことをわかってくれますが若い連中は知らない。知らない対象は説得できない。そういう社会なんです。ごめんこうむります。裏の仕事をやります。

## アジア社会への貢献

堀内…朝日新聞を早期退社して中国中原にある古都の洛陽から日本を見てみました。優れた国でした。日本製のモノを使って日本人のように暮らしたい。わずか一五年くらい前のことです。いま経済的には日本は技術も人材も資金も送ってアジア諸国のモノづくり、近代化に貢献している。歴史的にはそのとおりで、歴史家はそう書く。しかし残念ですが、政治的にはそういう動きになっていない。

藤井…「新成長戦略」には書いてあります。日本は科学技術に優れている。それを提供してともに繁栄する。企業人はよくやっています。もうひとつ大事なことは先端技術ばかりでなく「匠」の技術です。料理人、すしや、旋盤工、「匠の技術」はなんでもすぐれている。自由業でやれる人はやっています。あとは大企業のサラリーマン。これがわが国の中核ですからね。これを六五歳まではなんとかしようとする法律を直したわけですが、そういう面で活かせるかどうか。

尾崎…いまは領土問題なんかが出てきていますが、日本が戦後に中国とか東南アジアの社会で果たしてきた役割は相当ある。

藤井…あります。

## 若い政治家の歴史認識

尾崎…若い人は政治家も歴史を勉強していない。

藤井…そのとおり。尖閣の歴史も勉強していない。そこで党として「近現代歴史調査会」をやっている。議員だけでなく取材に来たマスコミの人なんかで満員。講師に新聞社の人にも来てもらった。幹事が「マスコミはなぜ戦前墮落したか」を頼んだら、「なぜ戦争を押しえられなかったか」でかんべんしてよ。

尾崎…「墮落したか」ではやりづらい。戦争をあおって新聞は部数を伸ばした。

藤井…満州事変で規律を破った「越境將軍」（林銑十郎）を礼賛したり、松岡（洋右）の連盟退でも「孤立」を礼賛した。「よくやった」といって礼賛。昭和六年にはまだ統制はなかった。その後、仲良くしないと取材できなくなった。そんな内輪の話をしてくれました。

## 高齢熟練社員のこと

尾崎…高齢社という会社があつて、遊んでいる人に仕事をつくつて。週に二、三回、日程は自由で働きたい人に働いてもらう。いま年収が三億円に。

藤井…需要があるんですね。経営者と決めるのではなくて能力のある社員は置くこと。月給をさげてもいいということにはなっている。

堀内…そのことで最後にひとつ。長年やってきた仕事の先で、高齢熟練社員は高齢者が使

う優れた製品をつくれないうものでしょうか。若い人の仕事を取るのではなくて、自分たちの暮らしを豊かにする製品をつくる。それぞれの企業が温存している高年技術者が企画してつくれば仕事ができてくる。そこしかない。六五歳までつないでも仕事をふやさないかぎりには。

藤井…いままでの会社の仕事をやってもらおう。

堀内…はい。温存しておいて、新しい企画をした人を残して。それなら自分もやる気になる。定年まで窓際で、ほかのところ出してやらせるのは違う。

尾崎…ウイン・ウインの関係をつくる。

### 商品も居場所もこれから

堀内…モノについては日本企業が東南アジアへ出ていってつくる百均商品が多すぎる。それまでは日本の熟練技術者がつくった優れた商品がありました。われわれ高齢者はアジア共生のために百均商品がまんしてきました。そろそろやや高でも安心して使える製品づくりをごく身近なところでそれぞれの企業がやる。

藤井…なるほどね。

尾崎…若い人の集まるまちは竹下通りとかある。老人が好むまちやマーケットがあつていい。阿佐ヶ谷なんかがいい。

藤井…デパートには老人コーナーができています。あれは大事なことです。

尾崎…・・それでは。

堀内…三年お待ちしました。うかがいたい細かいこと、まだこんなにあります。

藤井…またやりましょう。

・  
・  
・  
・

財政上のひと仕事は終えたものの、藤井さんにとって、ここまでは道半ばである。これからあとの経済成長をどうつくるか、そこに高齢者の潜在力をむけるという課題に回答を期待してお会いしたのだった。熟練高齢社員のありようについてはお話ができたが、地域活性化のための自治体と地域で果たす高齢者の役割などについては踏み込めなかった。遠く深い「尋根求底」のためにはもう一度の機会をえて、政治の側からわが国を蓋うデフレーション（萎縮）からの脱却の道筋を説明していただければと思う。（二〇一二年一月号）

一記 堀内正範）

『月刊文風』二〇一二年一月号）

\* 民主党近現代史研究会を主宰して

「戦争のない社会を守りつづける政治・歴史に学ぶ政治」

藤井裕久 民主党名誉顧問に聞く 二

二〇一三年一月十八日（金）

港区白金台の事務所にて

聞き手

尾崎美千生 元毎日新聞政治部副部長 高連協参与

堀内正範 朝日新聞社社友 「月刊丈風」編集人

### 民主党は惨敗 藤井さんは引退

前回の昨年一〇月には議員会館におたずねした藤井さんにお会いするため、今回は尾崎さんとふたり、一月十八日午後、雪の残る白金台の細道をたどって事務所におたずねした。

一二月一六日の総選挙で民主党は惨敗した。

その主要な要因のひとつとして、藤井さんのような優れた高齢議員を比例名簿のトップ

に置き、高齢者三〇〇万人（票。六五歳以上。有権者三・五人にひとり）に呼びかけて、「日本長寿社会（高齢社会）」を形成することで経済成長をもたらす政策、マニフェストの「人」の活力に期待する政策を掲げえなかった結果であると、ひそかに結論づけている。それは国際的にも注目されている「日本高齢社会」形成への道に渋滞をもたらした。

高齢者の持つ潜在力を活かして経済成長を呼び起こすにあたって、政治の側が動くには、藤井さんのようなベテラン議員の方々の参画を必要としている。今回は「高齢社会」に関することに絞らずにご意見を掲載したい。

### 継続する裏方の仕事

尾崎…藤井先生がこれからも続けられるお仕事は？

藤井…個人的には「勉強会」ですね。いまの若い議員は政治史はもちろんですが経済も歴史的に見なければということ、その「勉強会」の座長はやらせるといっています。あとは付き合いが深くなった「三党合意」がありましたから、与党（自民党と公明党）から出てくれるようにいわれています、これは表には出ません。これからは野田（毅・自民）と斉藤（哲夫・公明）と松本（剛明・民主）の三人でやることになると思います。それから党のほうからは会議なんかに残ってくださるよう念を押されている。

尾崎…「近現代歴史調査会」は先生のほうから。



藤井…そう、個人の意向として「近現代史」はやらせるようにいつてあります。二番目は与党の意向、三番目のは党の意向です。

### 選挙制度の改革

尾崎…われわれが勝手に判断して、藤井先生が引退するのは早すぎるということになった。

藤井…八〇ですよ。

尾崎…参議院に残ってそのあり方にも貢献していただく道があるのではないか。

藤井…選挙制度ではいま中選挙区云々がありますが、自民党の森（喜郎）さんと近く出る『中央公論』の対談で話しましたが、わたしは自民党を離党して小選挙区制をやったときのひとり。実際にやったのは羽田孜ですが、これにはふたつの理由があった。ひとつは自民党に派閥があつて複数で出る。強いから同じ自民党で政策的に賛成すると反対するのとふたりが通る。

堀内…ありえますね。

藤井…ありえるどころかほとんどがそう。通つて東京に出ると親分にいわれてふたりとも賛成派になる。つまり有権者を裏切ってしまう。もうひとつは金。中選挙区だと市が三つあれば事務所を三つ、そこに職員を置く。小選挙区だと一つ置くだけですむ。「ほんとに安くなりました」という議員の声を聞きます。森さんにこの話をしたら、彼はむしろ小選挙

区反対論者ですから、それは羽田のようにめぐまれた立場だからいえることだ、という。森さんは無所属で苦勞した。

尾崎…わが国の選挙制度も紆余曲折をたどっていますね。

藤井…歴史的にいうと、中選挙区制にしたときの内務大臣は若槻礼次郎。かれは、明治・大正は大選挙区と小選挙区をやった、しかし完全なものではなかった、だから真ん中を取って中選挙区にした、そう趣旨説明でいっています。どんな制度も絶対にはいいものはありませんよ。大選挙区は山県有朋のときにやった。これは政党ができないしくみ。戦後すぐ大選挙区をやったけれど、いろんなのが出てきて政党ができなかった。小選挙区は伊藤博文と原敬です。これはまちがいはなく二大政党論者です。そういう歴史的背景がある。だから参議院も含めて白紙で議論したらいい。森さんはわれわれはむかしを知っているから中選挙区がいいというが、いまのやつはいまの選挙制度で勝ったのだから改革に賛成しないという。いまの制度で勝ったら変えませんよ。一〇〇票でも勝ち負けは勝ち。『中央公論』の対談で司会者の時事通信の人が、「現役政治家にまかせたらだめなのは」といった。そうしたら森さんは「学者にまかせたらなおだめだ」といった。司会者が「では、あなたたちで作ったらどうですか」。もう少し加えて経験者グループをつくってやったらという。森さんは「いいですね」。誌面でどう扱われているかわかりませんが。

## 二院制のあり方

堀内…別の角度からの国民の代表が議する場としての参議院という意味でいえば、その経験者グループの方々によって基本的なところが議論されるのはいいですね。

藤井…戦後に「一院制にしろ」とマッカーサーがいった。それに対して幣原喜重郎は、日本は戦前には貴族院があつて、それなりにチェックしていたと主張した。いいチェックとはいえませんが。貴族院は保守反動のかたまりみたいなどころだったから。二院制ですから参議院はねじれなんていつているほうがおかしい。それがあたりまえ。同じだったら一院制しかない。それをいつたら参議院に呼びだされて謝ませられたことがあります。

堀内…いつごろのことですか。

藤井…西岡（武夫・元参議院議長）さんがまだ生きていたところで、本人は直接出てきませんでしたが、参議院の議運で謝ませられました。違うことをいうのが参議院。わたしは基本的には参議院はオール比例区、衆議院はオール小選挙区。これはひとつの案と思います。しかし今年の六月までには無理ですけれども。

堀内…参議院議員の選び方としては「枠」がいいのではないですか。「女性枠」とか「高齢者枠」とか「地方枠」とか「分野枠」。もちろん人を選ぶのは国民ですが。

藤井…それはひとつの考え方です。われわれは「じじい枠」ですか。

堀内…ただし「若い人の枠」も。三世代にわけてつくって、若い人でもこちらが都合のい

いい人はくればいい。

藤井…参議院では選挙区をやめてオール比例区でやる。それならわかります。ある意味でわたしの考え方と重なっている。

尾崎…ぼくらの参議院についての議論は、まず藤井さんのような経験のある方が残って参議院でやっていたただきたいということです。

藤井…先の衆議院選で全国をまわりましたが、安倍さんの国家論ではだめといいましたら、「あんた参議院に出ろ」というヤジが出ました。

堀内…それは理屈に裏表があるけれど鋭い発言と思います。

このままいったら二院制が崩れて意味がなくなる。

藤井…比例区が両方にあつて二院制はおかしい、権限より選挙制度を変えないかぎり、同じことになってしまう。

### 小選挙区制のメリット

尾崎…もともと藤井先生は小選挙区を推奨する立場でしたよね。

藤井…羽田孜が選挙制度調査会長だったとき、ぼくは小沢（一郎）さんとか羽田さんと自民党から出たのですから小選挙区論者です。表は羽田さん。わたしは小沢さんにいわれて羽田孜を代表に説得した。代表が羽田孜で、小沢さんは自分では表に出なかった。いまで

も中選挙区制にはふたつの理由で反対です。わたしの神奈川の選挙区の場合だと、自民党が強いと党内で意見が割れても二議席とれる。多摩川を渡ったとたん一本になってしまふ。これは選挙民への裏切り。それに金がかかる。このふたつをなくしたことで小選挙区制がいい。中選挙区制云々という話があったから、さっきの若槻礼次郎の話をして、ぜったいにいいという制度はないのだから白紙で議論したらいいといった。そしたら『中央公論』の対談で森さんは重ねて学者はだめだといった。

堀内…政治家から見えている範囲の学者はだめですね。隠れているところにいる。政治家のほうに寄ってきている学者はだめでしょうね。

藤井…みんなだめです。例にあげますが、浜田（宏一）は学者としてけしからん。あるところまで物価があがったら日銀が抑えればいい。リフレーション、つまり統制あるインフレ政策ができるという。それはできないことで、行き着くところまでいく。わたしはテレビで何度か言ったのですが、三重野（康・元日銀総裁）さんはバブルを抑えようとした。そのときは金丸信と渡辺美智雄が国会で金融対策を徹底的に批判した。結果として、やれといった人が命を絶っている。金融が悪いほうに動く、最後はやれといった人が命を絶つまでいく。これがインフレなんです。

参議院議員から衆議院議員へ

尾崎…参議院のほうの改革のことですが。

藤井…六月までという期限ではむずかしいが、抜本改革の必要はありますね。おそらく衆議院の○増五減とか比例定数四〇減とかいう目先のことをやるだけ。二院制の意味は何なのかには答えられない。衆議院では昭和五八年から完全な比例区を入れたのですが、そのとき角（田中角栄）さんに、「参議院をやめて衆議院にこい」といわれた。「衆議院の比例区ですか」と聞いたたら、「あんなものはなくなる。過渡的に衆議院の人数を減らす手段として比例区をつくっておくだけだ。おかしいという意見が出てどんどん切っていく」といいました。だから「小選挙区で戦え」と。

堀内…藤井さんとしてはびっくりされたでしょう。

藤井…びっくりしました。鳩山威一郎に引っ張りだされて参議院にいましたから。鳩山さんは「参議院議員として育てたかったんだよ。角さんがそんなことをいうのか、わたしは反対だな」といっていましたが、あの人も政治では角さんの弟子でしたからね。

堀内…参議院から移ったあとの藤井さんの衆議院でのお仕事はたいへんでしたね。衆議院で改革を模索する政党を右に左に上に下に。参議院のほうにいたほうがよかったかどうかは別にして。

藤井…行ったり来たりがいいとは思いませんが。いま自民党の中核で活躍している人も石破（茂）、野田（毅）、高市（早苗）もそう。表に出ているのは行ったり来たり組です。生

粹の自民党の森喜郎にいわせると、石破だけは理屈ばかりで信用できない。森さんは情の世界の人。

尾崎…今度の選挙は、先生ご自身ははじめからやるつもりはなかった。

藤井…もう平成一七年に落ちたときから、後継者も決めて。弁解のようでもいいにくいけれど、平成一九年に比例区で空いたから繰り上げ当選。どうすりゃいいんですかと聞いたなら総務省がいうには、三つの理由でなければ繰り上げ当選はやめられない。ひとつは死ぬこと、それから離党すること、あとは除名されること。ひとつ目は論外。民主党とここまできたものとしては離党したくない。除名はしてもらえない。それで平成一九年は繰り上げ当選しました。次の平成二一年の選挙では鳩山由紀夫が財務大臣になってほしいから名簿に載ってくれ。おしりの方に載つけてくれたから間違いないと思っていたら、ぜんぶ入っちゃった。だからやめたい気持ちちは平成一七年からありました。

尾崎…こんどの選挙では後継者の方は？

藤井…繰り上げのトップになりました。さっきからの参議院の話、これは考えてもいなかったこと。

尾崎…ルールがあつて出てはいけない？

藤井…民主党にはそんなルールはありません。自分でいやだといった。

尾崎…この前の選挙のとき、わたしの千葉二区では黒田（雄）さんが小沢派に移って樋口

(博康)さんが出た。樋口さんが見えて友人を紹介なんかしたのですが、実は藤井さんにお世話になっていているという。

藤井…「近現代歴史調査会」です。再開するにあたって事務局を頼んであります。

尾崎…樋口さんは習志野、八千代、花見川で先生に願って勉強会をやりたいとか。

藤井…言われました。一般の人も呼んでやりたいと。

### 「近現代歴史調査会」のこと

尾崎…民主党のなかにも近現代史を学びたいという人が多いのですか。

藤井…国会議員で常時出てくるのは一〇人くらいですが、一般の人で満員。そこで今度の「近現代歴史調査会」は登録制にした。あんたはだめといった例はありませんが、そのほうが自意識を持ってくださる。マスコミの人もずいぶん来ますし、講師になってもらっています。朝日新聞の早野(透・桜美林大)には、「マスコミはなぜ戦前墮落したか」で話してくれといったら、ちよつとタイトルを変えてほしいという。「なぜマスコミは戦争をやめさせられなかったのか」と、これならやりますということ。非常にいい話をしてくれましたよ。

尾崎…こんどは経済史を中心にして。

藤井…「近現代歴史調査会」は政治史です。ただ税調では経済史も学ばねばといいました。



なぜ消費税か、いまなぜやるんだというような経済の経緯。四〇年前から水田三喜男さん、そして大平（正芳）、中曽根（康弘）、竹下（登）さんへ。その経緯を話した。経済史も大事です。

### 野田首相の解散権

尾崎・藤井先生は総選挙はさいごまでやらないほうがいいといっておられました。野田さんは年内に決めてしまいました。

藤井・わたしの意見は知っているな、と。知っていますと言っていました。しかし解散権は総理の専権事項だから、すべての責任を総理として負えばいつでもいい。なぜあの時期にということでは、彼の性格からいって、まちががなく自民党と公明党に対して「三党合意」への恩義がありましたからね。野田だけではできなかつた。ただし「近くやる」なんて言わなければよかつた。言った以上は「近く」には来年というのは頭になかつた。

尾崎・そういう意味では残念な結果になつた。

藤井・専権だったのだから、すべての責任と結果は野田にある。だから野田はいまでも人の前に出ない。いやがつている。謙虚というか、立派な人も落としたという反省がある。大平さんの女婿の森田（一）が野田の激励会をやるうといってきた。大平さんのことを学んだ森田が激励してやるという招きを受けないのはまずい。愉快にやりましたよ。藤村

(修・元官房長官) も呼んでどんちやかやりました。

尾崎…野田さんは大平さんと昵懇だったのですか。

藤井…水田、田中、福田(赳夫)、大平、愛知(揆一)さんなど、警咳に接した五人の話は酒飲んでではしてましたから、五人の中では大平さんに惹かれたんでしょう。ですから森田のところに行ったのでしよう。大平さんは「環太平洋構想」をやった。それが「APEC」になり、そしてその実行版が「TPP」。そんな古い話はしないで森田といっしょに激励した。野田にこれを機に表に出たらいい、テレビまでは出る必要はないが、党内の重みのある発言は何かといいなさいといった。飲んでいたからいやだとはいわなかった。

#### 「人生六五年」から「人生九〇年」時代へ

尾崎…わたしも参加している高連協(高齢社会NGO連携協議会)としては、政治の世界で「高齢化」の問題をもっと取り上げてもらおうと考えています。わたしたちとしては、参議院の改革を含めて藤井さんにも参加していただきたいと思つて。

藤井…「高齢化」に対しては、前回も申しましたが、自由党のときに「消費税」を高齢者福祉の完全目的税とした。連立与党である自民党の宮沢(喜一・大蔵大臣)さんをお願いして「高齢者三経費」(基礎年金・老人医療・介護)として完全目的税とした。宮沢さんが予算総則(平成一一年)に書いてくれた。そのあと子育てをいれて四経費になり、もうひと

つ医療費は一般医療費にも使えるようにした。こんどの消費税の「三党合意」はその筋でできている。

堀内…宮沢さんはよく先をみてくれましたですね。

藤井…連立与党の立場としてよく聞いてくれました。

堀内…財政的に高齢者に手厚いのはいいことなのですが、高齢者が年々ふえても政治の側が「高齢社会対策」としての構想を掲げて対応してこなかった。その結果として高齢者の知識や技術や資産が潜在的に滞ってしまっている。

藤井…一五〇〇兆円が眠っている。

堀内…そういう状況をつくってしまいましたですね。

藤井…ひとつは贈与による減税。これから自民党内閣がやってくれればいいと思っっています。おれおれ詐欺にいくよりはいい。

堀内…われわれ高齢者が資産を子どもたちを使うのは三分の一はいいですが、三分の一は高齢者が高齢期の暮らしを充実させるために使う。仲間とうまく社会参加して使えば新たな経済効果を生むことになる。高齢者は自分たちの人生のためになぜ使おうとしないのか。藤井…できないのではなく、発想がない。

堀内…そういう発想は政治家にもないのですか。とくにすぐれた高齢政治家にお願いしたいのは、高齢者を現役とする将来構想を掲げるといった「高齢社会対策」なのです。

藤井…それを言い出した人はいません。

堀内…どうしてでしょうか。

藤井…わかりませんが、要するにお年寄りを使わないという前提があるんですよ。

堀内…そういう前提でみんなが年をとっていつてしまう。

藤井…使わないだろうというのに、なぜですかというご質問であれば、答えはそれしかないですね。若い人のほうには需要がいっぱいあるのだから、手っとりばやいというのが発想です。

堀内…われわれとか、われわれより上の人たちは自分のセキユリティを考えるよりみんなのために働いてきたしそういう暮らし方をしてきた。高連協代表の樋口（恵子）さんは「一〇〇歳時代」の初代として高齢者が安心して暮らせる社会をつくる役割がわたしたちにあるという。

藤井…女性の樋口さんですね。

堀内…昨年、有識者と官僚が見直した「高齢社会対策大綱」での重要な指摘は「六五年人生」に代わって「九〇年人生」への意識改革です。それを自分のものと考えれば二五年ある。その二五年を「余生」で過ごすのではなくて、みんなでなにかを考えて、自分が持っている知識と技術と資産をつかって「現役シニア」として自立して暮らす。長寿として得た期間をみんなのために使ってくださいというのが一九九九年の国連の「国際高齢者年」

のメッセージだった。この国ではどうしてか持っている能力を活かせない。

藤井…これは大事ですね。日本の高齢者の技術は高度です。先端技術のことばかりいいですが、わたしは「匠」の技術こそが大事だといっている。床屋さんでいい、料理人でいい。これが活きる社会にしなければ。これが「新成長戦略」です。それにどういう金をつけるかについては、たとえば外国にいくのに対しては補助をつけている。南洋にいつて寿司屋をやっている人は相当いい生活をしている。

### 高齢者の潜在力を活かす

堀内…国内で、地域や職域での高齢者の存在感の欠落が国力のデフレーション（萎縮）です。経済のデフレはみんなに判かりやすいけれど、年々高齢者が多くなって、一人ひとりが萎縮していく。これが国力を弱くしていることはたしかです。現役の若い人とともに現役の高齢者の活動として存在が見えてこない。

藤井…個別にやっている人はやっていますよね。八〇であろうと九〇であろうとやっています。

堀内…それを政治の側がなんとか、モノやサービスづくりやコミュニティをつくるのに支援するとか。

藤井…一生懸命に考えますよ。「高齢者雇用安定法」もそうですが。どんどん出ていく人も

いるし、もうおれはヤダという人もいる。

堀内…「シルバー人材センター」ですが、集まっている仕事というのが、この人たちがやる仕事ですかというレベルの仕事が多いです。だったらその人たちに考えてもらって、すぐれた知識も技術も持っているのですから、それを使って何か公園の管理にしろ、里山や街並み保存にしろ、特産品づくりにしろ、なぜやれないのか。これは政治、地方政治の仕事だと思いますが。

藤井…「高齢者雇用安定法」はそれに答えてはいるんですよ。手とり足とりはやりませんがね。あとは好きにやってください。会社の場合は勝手に首を切るのはやめて、必ず六五歳までは居られるようにする。非正規にするのはやっていいけれど。

堀内…わたしは情報のありようをみていますが、製品としての出版物を若づくりのものや女性向きのもの中心にしてしまつて、高齢社員が自分たちのためあるいは将来のための製品をつくることをしない。定年延長はいいのですけれど、新たな仕事をつくる意欲を削いでしまう。

藤井…それを政治にやらせるんですか。

堀内…いえ、これはそれぞれの分野の企業がやることです。

藤井…それだけの力が高齢者にあるのだから、力のある企業はやっています。たとえばデパートでは高齢者センターというのをつくっていますね。ああいうのはお答えしているひ

とつなんでしようね。そのうえで公がどうはいるかという話ですね。

堀内…将来構想は政治家は政治の場で、学者やジャーナリズムもやらなければならない仕事ですが。

藤井…企業人としては大きな需要が高齢者にあることはみんなよく知っています。それを政府で後押ししてという話ですね。

堀内…それがひとつ。それと若手の現役が考える高齢者や高齢社会であることです。政治の側でいえば五〇代の野田さんもわかっていない。企業でも現役世代が自分たちの先輩、六〇や七〇歳の人たちの暮らしや人生は分からない。

藤井…そうですね。企業人というのは金もうけだから需要があればそこをやるかと考えると思っていました。そうでもないですか。

堀内…実際に求めているものとずれる。それは最後は高齢者の側の問題なんです。高齢者が現役意識で参加できていない。生活者としての存在感がやっぱり薄いですね。

尾崎…この前、野田さんが新しい「高齢社会対策大綱」をつくるときに、これは十何年ぶりに改定したのですが、お年寄りの消費活動をもっと考えろ、それは答申の中にちゃんと入ったのです。経済できゅうきゅうとしているのだから、元気なお年寄りをもっと使う。消費もそうだし労働するほうもそう。そういう社会をもうちよつと考えていい。

藤井…それは大事なポイントですね。そこで公がどういう形で入るかが問題なんです。

## 年齢差別禁止法の制定を

尾崎…「雇用における年齢差別禁止法」ですか。あれを日本でもつくったほうがいいんじゃないでしょうか。

藤井…なるほど。

尾崎…アメリカとかE.U.ではすでにやっている。

藤井…「高齢者雇用安定法」などで間接的に段階的にはやっているんですね。

堀内…年金とつなげる六五歳までの定年延長を推進することで苦勞をしている段階。

尾崎…選挙でも「高齢化」をいうのですが、最後まで具体的にこうやろうといている人がいない。そういうことで「勉強会」をやろうかということですが、藤井先生ひとつ参加していただけませんか。げんきな高齢者をもっと活用する社会をつくろうということなんです。

堀内…意欲があっても三〇代とか四〇代ではむりですね。

藤井…自分が高齢者になったときの発想ができない。ただし金もうけの対象としては、企業人としてやっている。これはまだわからないけれど、細川護熙と前から接触しているんです。野田を引っ張り出そうということでも。いまのことはポイントのひとつなのですけれど、関心は「環境」なんです。何もかもというとうまくいきませんので、自然環境の保



護からということ。自分たちでやるので出てきてほしいという。ぼくは組むつもりです。ただね、流れは高齢者よりも環境に向いている。

### 世代間はウイン・ウインに

堀内…高連協というのは、ほんとうは高齢者みんなが知っていていい組織で、前世紀末に福祉に関係する団体を中心になって一九九九年の「国際高齢者年」の行事をやった。そのあと参加した四〇ほどの団体が集まって結成した。福祉中心ですが幅ひろく高齢社会の仕事をしてきています。高齢者の活動を差別しないためには雇用での高齢者に関する年齢制限をなんとかしようという。

藤井…定年退職したあとの日本の高齢者にはたしかに高い技術があります。旋盤工だって日本のレベルが高い。

尾崎…政治家については小泉さんのときに中曽根、宮沢さんに引退していただいた。あれはいまどうなんでしょう。

藤井…中曽根さんはいい気持ちは持っていないでしょう。

堀内…宮沢さんのように幅広い国際感覚のある人が参議院に一〇人もいらっしやったらずいぶん発言力がちがう。

尾崎…若い政治家が育つことは大事だけれど、「高齢社会」の形成にとっては藤井さんのよ

うな方が政治の現役の場を退かれることはマイナスになる。

藤井…参議院の改革は文書では約束はしているのですが、単なる削減の話で終わってしまふ。二院制といっても外国はイギリスは貴族院だし地方代表とか、それぞれに質的にちがいますから。

尾崎…世代間の格差がいわれるのですが、高齢者の側から自分たちのこととともに若い人たちのことをもつと考えなければならぬ。われわれの代表の堀田力さんは世代間の関係は雇用の関係なんかもうイン・インでなければならぬと。

藤井…それは大事な話。そうでしたね、堀田さんがやっているんですたね。

堀内…堀田さんは被災地でも具体的に「地域包括ケア」を考えてやっておられる。医療・福祉を地域の核にして自治体と高齢者みんなが包括して活動する。

藤井…そこでの元気な高齢者の役割は。

堀内…若い福祉の人も必要ですが、同世代として参加して地域の暮らしの問題を共有する。

藤井…同世代の会合は大事です。みんな「美空ひばり」でなつかしく話し合える。

## おわりに

尾崎…では、そろそろ。いろいろご計画はあるかとは思いますが。

藤井…わかりました。たいへんいい話で。議員なんかにならずに、これをもとにして細川

さんなんかと話し合つて。彼はまだ若いですが。

堀内…細川さんは昭和一三年生まれで七四歳。藤井さんと離れた考え方をしている人ではないですね。

尾崎…わたしたちも「近現代歴史調査会」に参加させてください。

藤井…事務局長は階（猛）です岩手県の。樋口が事務局です。議員でくるのは一〇人程度で少なすぎますが、ほとんど落ちてしまいました。樋口にいつて登録して参加してください。わたしは自由人になったからといって何もやらないようなことはいたしません。

堀内…最近、成田市に呼ばれた会合がありまして、そこで「明鏡疲れず」という話をしました。「明鏡止水」は政治家もよく使いますが「明鏡不疲」。

藤井…「疲れず」ですか。

堀内…はい。鏡は磨けば磨くほどよく写る。優れた人は明鏡のようだし、多労でも疲れな  
い。おおいに利用しましょうといったとき、藤井さんのお名前を使わせていただきました。

「明鏡不疲」でよろしくお願いいたします。

・・・

二〇一二年の年末に政権交代があつて、総理大臣が自民党の安倍晋三さん（五八歳・一九五四年）に変わったが、残念ながら「所信表明演説」（二〇一三・一・二八）には「高齢社会対策」はなく、優れた先達に援軍を求めて難局を乗り切るといふ「人々高齢者参加

による社会改革」構想はないようである。

金融と財政によるアベノミクス効果は一過性のものであり、その反動を食い止めて成長を持続するには、国民の側の活力のフォローが必要となる。

成長というと、若者による「成長」力ばかり強調され、年々増えて三〇〇〇万人に達した高齢者（六五歳以上）の持つ「成長・成熟・継承」力を軽視してきた。長年かけて培った知識・技術・経験、そしてほどほどの資産を保持している高齢者層の潜在力を社会的に有効に活かす暮らし方を提案するのは「高齢社会対策」であり、国際的に注目されている「日本長寿社会（高齢社会）構想」を掲げるのは政治の側の役割である。

（二〇一三・二・七記 堀内正範）

（『月刊文風』二〇一三年二月号）

\* 民主党近現代史研究会を主宰して

「戦争のない社会を守りつづける政治・歴史に学ぶ政治」

藤井裕久 民主党名誉顧問に聞く 三

二〇一三年八月二三日

港区白金台の事務所にて

聞き手

尾崎美千生 元毎日新聞政治部副部長 高連協参与

堀内正範 朝日新聞社社友 「月刊文風」編集人

### 民主党参院選も惨敗 安倍異次元金融緩和

昨年一〇月四日には議員会館におたずねした。一二月一六日の総選挙で民主党は大敗。藤井先生は退かれたため、一月一八日は雪の残る白金台の細道をたどって事務所におたずねした。その後、民主党は七月二一日の参院選にも敗れた。ふたつの国政選挙に勝って、自民党の安倍首相は「脱デフレ脱却」のため「異次元の金融緩和」に着手し、オリンピック

ク招致の追い風を受けて、「消費税増税」実施という「歴史的」局面を迎えようとしている。

### ・「藤井裕久先生の叙勲受章祝賀会」のこと

地元相模原の有志の人びとが中心になって旭日大綬章の「叙勲受章祝賀会」をおこなうことになった。

日時 平成二五年九月一六日（祝日） 午前一一時

会場 小田急ホテルセンチュリー相模大野

藤井先生がお世話になったというだけに経済界、政界、マスコミ界、ご友人など三〇〇人余の錚々たる方々が臨席される。マスコミの人は大事なものと、尾崎・堀内もご招待の声を掛けていただいた。（二〇一三・九・九 記 堀内）  
（九月一六日の会の話があつて）

### 歴史から何を学ぶのか

藤井…ところできょうは何ですか。

尾崎…ことは夏が暑かったから、先生どうしておられるかなと思って。ぜんぜんお変わりないですね。

藤井…つい最近、『東京新聞』に出たんですがね。ぼくが原爆づくりに引っ張り出されたと

いう話。

尾崎…原爆づくり？

藤井…こういうことなんですよ。昭和一九年に、これからは若いヤツに原爆をつくらせなければダメだというので、中学一年生から三年生までを選んで、「特別科学組」と称するものをつくったのです。それにぼくは引っぱり出されて、中学（東京高等師範学校付属）に入っただけの二〇年五月に金沢にいったのです。旧制の第四高等学校です、いまの金沢大学。嫌だったのは、東京にいる連中は死ぬ覚悟なのに金沢にいくということ。命が助かるということでしたから。一年で三角関数・微分・積分をやりました。そのとき原子核は仁科芳雄それから藤岡由夫がいた。それが講義をしにきて「君らは新型兵器の尖兵だ」なんていって。

堀内…仁科さんのことは聞いていましたが、藤井先生にそんなことがあったのですか。

藤井…これが新聞記事です。八月一五日の『東京新聞』に出ました。

尾崎…これまでに紹介されたことはあったのですか。

藤井…あります。戦後六八年、日本が平和だったのは「戦後レジーム」によるのに、自民党がやってきたそれを「脱却する」というのは、自己否定です。安倍（晋三、首相）のよいうなことをやってはダメだといっています。アベノミクスは経済ですが、これは歴史観が間違っているという話なんです。

尾崎…藤井先生はアベノミクスに対して批判的だから。

藤井…批判的じゃなく大反対。

堀内…たったお一人でなさっている。

藤井…最近、ドイツ連邦銀行が「あんなものが続くわけがない」と言っています。

堀内…『朝日新聞』にも小さな記事ができました。

藤井…それです。ドイツ連銀はそうみている。ドイツ連銀は政府からは独立した立場を守っている。もうひとつ、麻生（太郎、自民党副総理）のユダヤ発言については『プレス民主』に書きました。麻生は基礎的教養がない、四年前にも「未曾有（みぞうゆう）」なんていって話題になった。

尾崎…K・Y（漢字が読めない）といわれた。

藤井…あのとき、ある会で司会者の小島慶子が「わたしも学習院だけれど、学習院の女性もつと教養があります」なんて、会の終わったあと言っていた。

堀内…文人とまでは言わないまでも、政治リーダーは、え？　と言われるようなことを言っただけじゃないね。

藤井…いけません。ドイツはヨーロッパ諸国には詫びていませんが、ユダヤ人に対しては始終詫びています。安倍は先輩を裏切っています。「戦後レジーム」をつくったのは自民党と多くの良識ある国民です。それをぶち壊すというのは許せないことです。



尾崎…最近もメルケルはお花をあげて謝っています。

藤井…メルケルは謝っているのに、安倍晋三は「侵略ではない」なんていつている。

堀内…それは国際的には通らないルール違反ですね。

藤井…世界からボイコットされてしまいます。斎藤（邦彦）元駐米大使と話したのですが、「ストロングライト」といわれているじゃないかといったら、「その件はもう解決しました」という。ことばでは解決したけれど、「超国家主義者」であるというレッテルを張られてしまっている。こんな総理はつづくわけがない。アメリカも含めて国際的に批判されている。とくに中国や韓国は、これはもうダメです。安倍ではダメ。三年間、選挙をやらないのなら、自民党でいいからもっとまっとうな人物を出せ。

堀内…まっとうな人というと。

藤井…わかりません。が、そう言わないと。

尾崎…どこで言われたのですか。

藤井…TBS（日曜「時事放談」）で言っています。このあいだもいきました。「TPP」はやれ。デフレでもなんでもない。有効需要をつける手段としては、国内は少子高齢化の見直し、それに規制改革で農地の改革も大事。外に対しては高度成長をつづけている新興国に対して、わが国の科学技術や匠の技術を提供して、新興国の成長力をもたらしてくる。安倍さんのたた一つのいいところは、「TPP」に積極的なことだけ、後はみんなダメだ。

堀内…国際的孤立はいけませんね。昭和六年の満州事変のときにも。

藤井…そのとおりです。今度の本（『劇場型デモクラシーの超克』中央公論新社）で早野もいつています。この本は差し上げます。

尾崎…ありがとうございます。

堀内…セミナーで加藤（陽子、東大教授）さんが言っていたのは、国際的に孤立しないこと、同時に世論がそれを支持してはいけないということ。いま世論が・・・。

藤井…それです。山本七平が「空気で動く」社会はこわいといった。当たるか当たらないか、わからない。はずれたのが戦争で、今がそう。それはこのあいだTBSで言いました。

「空気で動く」社会はこわい。

堀内…先に申しあげますが、マスコミの問題。

藤井…それは言いません。早野に「マスコミはなぜ墮落したか」で話してくれるよういつたら、「メディアはなぜ戦争を止められなかったか」にしてください、と。

堀内…国際的に孤立しながら世論がそうなってしまうと、もう戻せない。

藤井…そうです、戻せない。今度の会でもそれは言うつもりです。わたしの残った人生で「平和」だけはやると言っています。

堀内…お願いします。

### 「異次元」の経済政策のゆくえ

尾崎…安倍さんは歴史認識の問題もありますけれど、アベノミクスの効果は。

藤井…金融で経済をよくするというのは全部失敗しています。吉野俊彦という日銀マンがいますが、かれがキンドルバーガーの本『熱狂、恐慌、崩壊』（日本経済新聞社）を翻訳したのですが、いま熱狂の初期なのです。金融を甘くするとかならずそうなる。すでに年金生活者は疎外されていますが、いまワッシュヨイ、ワッシュヨイやっている連中がかならず自殺するんです。熱狂したヤツが崩壊する。なぜかというとはまりこむと人間は最後までいく。山一証券がつぶれた。あおった方が倒産している。人間の恐さです。半分以上はもう二度とあんなのに乗りませんといい、あと半分はうまく逃げますという。それができたら死にはしない。死んだのはみんなそう思っていたけれど、人間の弱さなんです。

堀内…人間だけではなくて、組織・団体もそう。

藤井…不動産業界と証券業界、これがいま燃えている。燃えている業界がかならずつぶれる。山一がそうでした。もうひとつ（三洋証券）、それに北海道拓殖銀行。必ずそうなる。それを吉野俊彦はキンドルバーガーの本を翻訳することで説明している。

堀内…アベノミクスについて、いろんな人がさまざまいうけれど、どこかで評価したり認

めたりしている。藤井さんだけでした、はっきりダメといているのは。

藤井…愛川欣也から『東京新聞』を読んだといって手紙がきましたよ。自分はアベノミクスなんておかしいなと思っていながらも、みんなが評価するものだから若干いいのかと思いかけていた。あなたの文章でやっぱりダメなことがよくわかりました。そこはだれかがいわないと。

堀内…その発言は大事ですね。テレビをみていて、藤井さんよくぞといて拍手しましたよ。

尾崎…これから月給があがるという期待があるが。

藤井…あがりません。もう終わっています。いまダメな人はもうダメ。いまいい人がこれからダメになる。熱狂の初期だといいました。選挙も終わりましたから間もなく熱狂も中期にはいります。末期は来年に。ですから崩壊は来年だと思えます。安倍はつづくわけがない。石原信雄（元内閣官房副長官）も今度の会にきませんが、安倍は歴史観で間違っつづぶれるといっている。ぼくはそれより早く、金融でつぶれると思っています。そっちが早い。というのは、自民党はかれの歴史観の誤りを抑えている。

### 民主党の党内情勢について

尾崎…民主党の党内情勢はどうなのですか。

藤井…外には言いにくいところだけれど、こういうことは言っています。第二党であることを忘れてはいけない。第三党はどこかといえ、選挙区では共産党、比例区では維新の会です。世の中だれも一党だけでいいとは思っていません。差はあっても第二党がその責任を負わなければならない。それは君らなんだと言っています。与党のときなぜ負けたのか。野党体質が抜けきらなかったからだ。

ひとつは若い連中が革命だといった。革命と改革は違う。革命はぜんぶをひっくり返すことで、そんなことを世の中の人は期待してはいない。

二番目は議論だけしている。税調で言いましたよ、そんなにしたいのなら大晦日に初日の出までやるぞ。議論をするのが与党じゃない、議論は大事だけれども、決めるのが与党なんだ。

三番目に役人との付き合いで間違っている。みんなテレビでいいましたよ。自民党は一党でしたから役人の上に乗っていた。野党としてそれを批判するのはいいけれど、こっちが与党になったときには役人を使わなければならない。それなのに、役人は敵だ敵だと言った。これが世間から批判を受けている。自分からは言いにくいけれども、わたしはチーム藤井で、横にかならず事務次官とか担当局長を置いて、われわれが決めたからあとは君たちだよ。

堀内…実務を継続するのはあの人たちですからね。

藤井…野党体質としてもうひとつ、鳩山(由紀夫、元首相)の話もしたのです。鳩山が普天間のことをいったのは正しい。大田(実)海軍少将の話もしましたよ。「県民ニ対シ後世特別ノ御高配ヲ」といって自決されたのに応えることは正しい。しかし野党のときの癖で、ひとことといえばそれが通ると思っている。わたしは佐藤栄作、田中角栄に秘書官でつかえたけれど、佐藤栄作は後半にもやっていないといわれるけれど、沖繩を返してもらうために民主党のジョンソン、共和党のニクソンとの間で根回しをずっとやってきた。これが与党と野党との違いだ、とこれもテレビで言っています。

つまりは野党体質からきているので、いま残っている本流の連中はわかっています。野党体質は二度とあってはいけません。第二党といってもいまは差があります。けれども民主党ができたときは支持率四、五%だった。自民党は三〇%あった。でもひっくりかえったのです。与党の経験をしたのだから、まじめにやりなさい。

尾崎…それを先生がおっしゃったのは、参議院選挙のあとですか。

藤井…前から後までずっと言っています。

尾崎…自民党だけになったのではまずい。

藤井…おっしゃる通り、それはみんなそう思っています。一強何弱といわれていますが、わたしは個々のテーマで協力するのはいいけれど、合わせてもまた割れる。だから中核になるのは民主党なんだよ。

堀内…与党の経験をした人が経験を大事にして。

藤井…小沢グループは最後までグジュグジュ言って出ていった。そしてみんな負けたので、あれは片付いたのです。まだ片づけなければというのが数人残っています。あまり党内のそういうことには関与しないようにしていますけれど。ひとつ海江田（万里、代表）に言ったことは、麻生のユダヤ発言だけは許すな。そう言ったらすぐに反応してくれました。「言語道断」とかいって、『プレス民主』に書いてくださいといってきたのは海江田からでした。

尾崎…海江田さんは大丈夫ですかね。まことにやさしい人だけでも。党首としては。

藤井…漢学の素養があつて、及川古志郎みたいところがある。及川は日独伊の三国同盟の推進者で、米内光政が徹底してあの野郎といった。

堀内…海江田さんから最近、色紙をいただきました。「冰心玉壺」。氷のような澄明な心を玉の壺に収めているという友誼の思いを伝えることばとして。

藤井…わかる。

堀内…フェイスブックに「四文字熟語」の欄をつくって載せていますから、中国の人にもわかる。

藤井…及川古志郎だなと思うところがある。学があつても判断を間違えることがある。

三国同盟に賛成したということで、海軍トリオといわれた米内、山本、井上らは反対したわけですが、及川が賛成に回ったものだから米内は烈火のごとく怒った。

尾崎…先生のような人が言わないとだめですよ。

堀内…これはご本人の前で言うのは失礼かもしれませんが、選挙で自民党への国民の支持は増えていない。今回は選びようがなくて、じっと見ている有権者が数多くいた。とくに若いころに安保や学生運動をやったり見たりして高齢者になった人びとは、みんな元気でアクチブです。その人たちは、民主党を見ています。相当な数の有権者が自民党ではない日本の将来の姿を掲げる再生民主党を見ています。参議院から衆議院に移ってご苦労されてきた藤井さんの動向を見ている。その人たちの期待は海江田民主党ではなく、藤井民主党です。

藤井…新しい政治の本流ですよ。今度の会には野田佳彦と自民党の野田毅を呼んでいます。野田毅もインテリ。党の偉いのは呼んでいないけれどくるかといったら、行きます。

尾崎…現実に若い人ではだれが。

藤井…ほんとうのことをいいますと、いずれ野田の時代がきます。もう一人、奈良の…。尾崎…馬淵（澄夫）。あれは使ったほうがいい。

藤井…副をつけて使っています。本会議場で田中角栄を礼賛したのはあれしかない。「わたしは田中角栄さんを尊敬しています。田中さんは自分で法律をつくった」。

尾崎…藤井さんもそうお考えですか。

藤井…そうです。裏では飲んでいますよ。「お前の時代はかならずくる。ただしトップじゃ



ないぞ」。セカンドでいい。セカンドにしつかりしたのがいれば、党はしつかりする。トップはだれにするかは別ですが。いまの官房長官の菅（義偉）と同じ。いまの内閣でいいのはあれだけ。やっぱり叩き上げなんですよ。馬淵も叩き上げ、だから角栄さんのことを尊敬している。菅もそうでしょ、金の卵です。

尾崎…海江田さんとカンボジアへいっしょに行っただけですよ。こっちにお墓がありますよ、といったら、そっちへいくのをやめよう。子どもみたいなところがある。

藤井…民主党はいま評判が悪すぎます。かならず戻ります。もう底です。まじめにやっつければ、リアクションでかならず戻ります。

尾崎…松下さんの政経塾には政治家を育てるのに何か問題があつたのですか。

藤井…松下さんでなくてその後の人が政経塾を悪くしたと思います。松下さんは人間を語っているはずです。技術的なことは政治家より役人のほうが上です。人間として尊敬されれば、かならず政治家のいうことを聞くのですよ。屁理屈をこねるよりは人格者だと思つたらいうことを聞きます。塾は茅ヶ崎ですから選挙区内で、関心はありましたがよくは知りません。が、松下さんは人間を育てようとしたのだと思います。野田はその一期生、神奈川県知事だった松沢は三期生。そこいらは松下さんから習っている。一〇期生とかになると、選挙に勝つにはどうすればいいかといった選挙技術だけを教わっている。そんなこと

は塾をつくって教えることではない。

尾崎…前原（誠司）は？

藤井…あれは八期生かそこいらでしょう。中田（宏）、あれが一〇期生。

堀内…屁理屈の組ですか。

藤井…理屈をこねる術を教えるというのは、たしかに外国にはあるでしょうが、松下さんはそうではないと思う。

尾崎…人間学でしょう。

藤井…そうです。

堀内…塾をつくった趣意は初期の段階で終わっているのですね。創業者がいなくなると。

藤井…会社であろうと政党であろうと、創業者がいちばん偉いのです。

### 一強自民党と対抗する政策

尾崎…次は三年くらい選挙がないといわれていますが、民主党はいつごろちゃんとするのですか。

藤井…徐々に徐々にです。

尾崎…一〇年かかりますか。

藤井…かかりませんね。まず安倍が失敗しますから。石原信雄さんは、得意とするところで失敗するといっているけれど、ぼくは経済政策だと思っています。安倍には憲法改正はやってもらいたくない。三年間、自民党がつづくのでしようが、憲法の議論をするにしても、もっとまっとうな人がいます。その人にやってもらいましょう。

尾崎…共産党と維新。こういうところといっしょにやっていくのでしょうか。

藤井…テーマごとに政策協調。いっしょには絶対なりません。また分裂するだけですから。

尾崎…部分連合みたいな。

藤井…部分連合までいかない。憲法反対とか賛成とか、それでいい。

尾崎…二つの政党とすると、政策の柱としては、何があるのですか。憲法ですか、環境ですか。

藤井…そういうものではなく、これは民主党は正しいと思っていますが、働く人とか消費者とかを主体に考える。一方、自民党は企業経営者を主体に考える。これは相当大きい違いと思います。雇用の問題でも、「安定」といったのは公明党だけで、特に自民党はどんどん変えろです。明治維新のときには士農工商が商になった。渋沢栄一がいますね。池田内閣のときには鉄をハンマーに。そういう時期は歴史的にあるけれど、そうでない時期は安定していかないと。今度の選挙では「安定」は公明党だけで、あとはどの党も偉そうなことで、できもしないことをいつている。「維新の会」なんかは特に。できないことはわかって

いるのです。

尾崎…先生のおっしゃった働く階級の人たちと、資本家というか経営者の側とが二つの軸になる。

藤井…働く人と経営者ですね。経営者だってサラリーマンですから働く人にすぎないのですが、やっぱりかれらなりの理念というか考えがある。企業が伸びれば社会がよくなるとする発想。たとえば池田内閣のときはそれなのです。下村（治）は「投資（investment）が命」といった。いまは違う。需要が足りない。過剰生産になっている。需要をつけなければいけない。国内では何だといえ、少子高齢化対策をしつかりやる。あとは外へ出ること。政府がやろうとしている企業減税とは違う。これは会社が利益を残すだけ。この一〇年間、働く人の賃金は落ちっぱなしです。それに対して会社は一〇〇兆円を蓄積しています。それを共産党みたいに悪のかたまりだとはいいませんが、これが企業の論理です。働く人に還元しておりません。

尾崎…働く人を主体とするそのあたりのお考えは、先生のこれまでの考えと違いを感じますが。

藤井…前からいってはいました。まず「消費税増税」は絶対やらなければならぬ。なぜか。「社会保障」を安定させる意味で。還元する意味でこのままの「福祉」をつづけるためにはますます国債を増発せねばならなくなる。そのためにやる。働く人の立場で国内の需

給のアンバランスを是正する。だから同じです。

### 将来の人口問題

尾崎…「少子高齢化」は盛んに言われるのだけれども、打っ手がなくて、みんな困っている。藤井…そう思います。「高齢化」に対しては、ひとつは迂遠かもしれないが、六五歳でしごとをやめてしまうことを改める。少ないですが、七〇歳だって八〇歳だって働く人はみんな働いている。「少子化」は、子どもを産めなんていうのはいけません。産める環境をつくることはいい。

尾崎…家族政策みたいなものは必要ですね。

藤井…子どもを産んだら商品をやるみたいなのは絶対ダメですよ。何を考えているのか。

尾崎…合計特殊出生率で考えていっても無理です。人口が減る。二〇六〇年に八六七四万人、やむなしになる。イギリス、フランス、ドイツにしても活躍している国は、六〇〇〇万人から八〇〇万人。わが国も八〇〇〇万人に減っても対応はできる。

藤井…限度はありますが、やはり移民ですね。日本の国粹主義はダメです。それに海外に出ていくのも大事。国境を低くする。

尾崎…移民は右翼がさわぐでしょうね。でもカネがあつたら子どもを産ませるもひどい。

堀内…モスクワの「世界陸上」などスポーツをみていますと、ヨーロッパの国の選手は圧

倒的に黒人。

藤井…若い人はフランスは黒人の国だと思っている。

堀内…日本はそのところが違う。

藤井…純粋なですよ。

尾崎…河合隼雄さん、亡くなりましたけれど、あの人と橋本政権のとき審議会でいっしよだったのですが、この会は増やすための会だけれどかならずしも増やす必要もないのではないかとすでに「少子化」を言っていました。

堀内…増やすための政策的な努力はやった上でないと。

藤井…日本が世界第二はやめるといふことですよ。人口の多いほうがGDPは増えますよ。一人あたりは別ですが。

尾崎…ドイツの人口政策は戦争です。フランスと戦争をやって負けた。兵隊の数を増やせ、それで子どもの数を増やしてきた。

藤井…ドイツの偉いのはアデナウアーです。フランスに負けると今度はやつつけるという話になるのですが、EUはフランス主導でできたわけですけど、ジャン・モネやシューマンの構想にアデナウアーはすぐに乗った。これはドイツ人としては例外です。アルザス・ロレーヌの取り合い。それをやめたのはアデナウアーです。東の吉田茂、西のアデナウアー。吉田茂はそれなりに偉かった。

## 平和裏に「地方の力」を活かす

堀内…「地方」の問題でおうかがいしたいのですが、田中角栄さんのすごいのは、平和の時代でしたが、地方に目を向けて開発をおこなった。

藤井…平和主義で民主主義という早野の評価ですね。

堀内…はい、セミナーでも言っていました。それは戦前の石橋湛山につながる。いま地方に目を向けて、地方の力をつけることが、平和裏に国を護る意識を醸成する。軍隊と対外的な対応に国民の意識が向かってしまうのはよくない。「歴史に学ばない」ことになる。ではどうやってみんなの力を「地方」へ向けていくか。ここがちよつとはつきりしないのですが。

藤井…むずかしいですが、ひとつ「農業」があります。いまの農業では国際的に負けてしまふ。といって国境の壁を高くしてもダメで、土地政策ですね。われわれがやり出しているのでやってくれるとは思いますが、土地を公が買うなり借りて、公の力で貸す。それと「六次産業」ですね。

堀内…そこですね。「六次産業」にすると産業育成になるし地域の特性が活きてくる。地域の特性がモノとして見えてくる。

藤井…これも亜流と思われるのですが、「観光」です。「観光」が大事なものは、農業の育成

になる。魚沼産コシヒカリが観光できた人のみやげになる。「六次産業」の製品もそうです。地方を強くするのは、そういうものの地道な積み上げなんです。

堀内…「観光」というのも、もっといろいろなものを見てくるといいですね。地元の人に出合ったり。

藤井…旅行者が儲かるだけではない。

堀内…そうですね。地域の問題として「農業」があり「観光」があり、あとは定年になって地域にもどった「元気な高齢者」が動いていない。これをどうするか。

藤井…それがむずかしい。ぼくらの友達も大企業で重役になったりしていますから、億という退職金をもらって地元へ帰って邸宅をつくるんですよ。でも付き合う相手がいない。そこで新幹線で東京へ出てきて飲んでいる。

堀内…それでは地方のためとはいえませんがね。

藤井…結局、そうなってしまうている。悪循環なんです。池田内閣のころですよ、みんな都会に出てきた。都会で生活をして、年をとったらやっぱりいなか生活がいいといつて帰る。家も建てた。しかし付き合うだれもない。なにもすることがない。

堀内…そこでなにをするか。長年かけて培った技術、知識、それに資産を持っている人たちが地域にいるわけですから。そういう人たちが東京に出てこないで、長い高齢期を地域でなんとか楽しんで過ごす。



藤井…どうも男のほうがね、女の人にはできるのですよ。

堀内…井戸端会議。

藤井…男性は邸宅に住んで、新幹線で東京に出てくる。

堀内…国力の萎縮の原因はこれですよ。なんとかしてください。わが国が国民運動として地方をどうこうしていれば、国軍や憲法改正で動いているよりも「平和」で動いていることになる。そこで高齢者が動いていけば、「高齢社会」をつくっているなということになって、それが外から見える。韓国であろうと中国であろうと、そこについてとやかくいうことはない。日本の地域が強くなる。というか、活力が回復するわけですから。

藤井…いまの話は大事なところですが、決め手がない。

堀内…そこをなんとか。決め手をさがして。

藤井…とにかく池田内閣のときに、どっと出てきた。それがみんな独立して中小企業のかたまりになって、日本をつくりあげたのです。「くじけちゃならない人生が、あの日ここからはじまった」と井沢八郎の『ああ上野駅』の歌がありますよね。昔なんかその代表です。これらの人が日本を建て直したのです。みんな東京に出てきたわけですが、あのとこのことを考えれば必要で悪くはなかったのです。

堀内…その人びとにもう一仕事ですね。

藤井…帰る。

堀内…はい、ふるさとというか地域へ帰って。大きい家を建てすぎないで半分にして、あとの半分は地域にもどして。

### 「異次元」の実業を呼び起こす

尾崎…「健康大国」というのはいかがでしょう。どこにいてもだれでも健康をいやがる人はいない。人口問題の故黒田俊夫さんがいつていたのですが、日本は世界一の長寿国になった。平均寿命は社会の関数ですから、要素を考えてこれを売り出したらどうでしょう。

藤井…それは、やり出していますね。まちづくりや健康事業も売っています。東南アジアなんかでは買い手がいっぱいいます。日本の国内の話ではないけれど。製造業だけではない、そういう事業はものすごく大事です。

尾崎…デンマークなんかでは隙間産業として人工肛門まで作って売っている。それで国の経済を潤している。

藤井…日本の科学技術は相当に高いレベルにあると思います。匠の技もいい。日本の料理はすごいです。製造業は大事ですよ。しかしいまの製造業だけで円安でやればいいという発想がよくない。マイナスが大きいのですから。

尾崎…そこにアベノミクスの間違いがある。

藤井…基本的な間違がある。円安にして製造業を伸ばす。昭和初期の「ソーシヤル・ダ

ンピング」と同じ。働く人の給料を切って輸出を伸ばすというやり方です。円安で自分の国を弱くすることによって一部の企業・業者伸ばしている。基本的に間違っている。

尾崎…黒田（東彦）さんはまた緩和をすすめればいいとかいっていますけれど。

藤井…黒田、あれはダメだ。わかっているんだと思います。安倍さんに言われた以上、刃向かうことはできないのだと思います。カネをばんばん出しておいて財政健全化はムリです。浜田（宏一）という学者と同じ発想になっている。

堀内…何かやらなければ経済がもたない。そこで自分のところのできる「異次元」の金融緩和をやった。それに対応する実態を呼び起こす「異次元の政策」が掲げられなければ国民が動かない。「異次元の財政赤字」になりますね。

藤井…浜田は湘南高校なんです。湘南高校出の友人がいるのですが、「あれは変人だよ」といっていました。ノーベル賞をもらえるようなのはどこか変人なのでしょうね。でも日本を悪くしては困るのです。

尾崎…わかりました。藤井先生に久しぶりにお会いしたら元気になりました。

藤井…元気を出してください。ひとつこの本を読んでみてください。

### 「歴史を学ぶ」セミナーのこと

尾崎…セミナーをやった岩見（隆夫）さんが肝臓ガンで慶応大学に入院した。

藤井…かれもいい役割を果たしている。いい本を書いています、満州の話もいい。  
尾崎…ところでセミナーはやめたのですか。

藤井…エンドレスです。国会開会中でないと議員が集まらない。秋の臨時国会が開会したらまた始めます。加藤陽子にまたやつてもらおうつもりです。エンドレス。この本は第三巻。いい先生はけっこういるんです。

堀内…加藤さんは内容もいいですね。ただ東大で学生に教えるように、早口で淀みなくなさるものですから、こちらはくたびれてしまう。

尾崎…全学連だったという坂野（潤治）さんとは仲良くないのでしょうか。

藤井…弟子というのは本質的などころは引き継ぐでしょうけれど、おやじから見ると生意気ですよ。みんなそうなんです。このセミナーを七、八年前に始めたときは、坂野さんと三谷（太一郎）さんが助けてくれたのです。それが『歴史をつくるもの（上・下）』（中央公論新社）という二冊になっている。三谷さんは宮内庁参与で団藤重光さんのような役割のしごとをしている。いい先生です。

### 議員年齢制限と「クオータ制」

堀内…昨年一〇月に議員会館にお訪ねしましたが、衆院選の日がどうなるかという微妙な時期でした。あのとき先生は遅いほうがいい。同時選挙よりもっとあと。今ごろと

いうことでした。

藤井…そう、もう二、三カ月あと。

堀内…ここまで引つ張れるかどうかということでした。

藤井…野田が正直なのですよ。岸信介が大野伴睦に総裁にしてやるといって念書まで書いたのに、無視してへっちららだった。そこまで野田にも言ったのですよ。野田は正直なんです。

尾崎…国会で、選挙やりますか、やりましょう、で降りちゃった。

堀内…あれは政治ではない。

藤井…正直すぎる。相手との約束に対する信義なのです。

堀内…ここまで引つ張っていたら違った情勢になっていた。

藤井…もつと悪かったかもしれない。良かったかもしれない。そろそろですよ。

堀内…国民が増税の前に「社会保障」の内容についてしっかり議論する、そして選挙、で良かったのではないか。

尾崎…ぎりぎりまで引つ張ったほうが良かった。

藤井…選挙をすると世の中は動かなくなる。むかしはカネをばらまくから、世の中よくなるなんてバカなことをいったけれど。

堀内…選挙でほんとうに「社会保障」の内容を議論するならいいのですが。有権者となん

の関係もない。

藤井…できもしないことをいうだけ。

堀内…それで数字だけが動いてしまいました。

藤井…おおせの通りです。だから一〇月でよかったです。

尾崎…最近は細川護熙さんとは。かれは現実の問題にはタッチしないのですか。

藤井…数か月ほど前に会いました。もっと出なさいよといっている。意見が同じなんです、まだ野田がやっている時期に野田しかないといっていました。みんな日本新党なんですよ。

堀内…日本新党のときは大事な時期でしたね。たしか女性のための「クオータ制」をやった。高齢議員の「クオータ制」といっているのですが、もし参院選までにそれができていれば、細川さん、藤井さん、福田さん、野中さん、河野さん、土井さんもいい。そういう人たちが参議院の後ろの席にきちんとかまえていらっしやるという状況がつかれなかったわけではない。

藤井…そうですね。残念ですね。細川さんは、釜をつくっているだけじゃありません。いろいろな意見をもっていますよ。木を植えるのもいい。チャータールだって絵をかいていたのですから。

尾崎…民主党は次の選挙の公認は七〇歳以下にというのは、違うのではないですか。

堀内…「年齢差別撤廃」の時代の流れと「年齢制限」というのは逆じゃないですか。

藤井…若ければいいという意見は消えましたね。ここ一〇年で。若ければいい、ジジイやババアはダメだった。

堀内…振り子が行き過ぎました。若い人だけの議論では国政になりません。

藤井…世論は動くのですね。

尾崎…小選挙区制についてはお考えがおありでしょう。

藤井…ぼくは小選挙区制論者ですから。自民党のときでしたが、選挙制度調査会で、羽田孜と後藤田正晴。そのとき羽田とか後藤田がいったのは、中選挙区制ではダメだ。自民党内から賛成と反対が通る。ところが東京へいくと党が反対を許さないという二人とも賛成になってしまふ。これでは選挙民を裏切ることになる。だから一人しか出さない小選挙区制に。それだけではないし、これまで選挙をやってきて、反対論者の意見も聞かなくてはならない。河野洋平さんまでそういう。

尾崎…先生にお聞きしたいのですけれど、近現代史のセミナーで、北澤（俊美）さんがい

まの憲法があるので防衛大臣ができたという発言をしていました。

藤井…北澤ですか。羽田孜の弟子で、長野県の県議会議員です。安全保障調査会するとき北澤もいたので、大平正芳という先輩は精緻にして簡素な防衛力と言っていたと言ったら、北澤は困ったような顔をしていました。

尾崎…防衛大臣をやった人がはつきりと憲法九条の存在の意味について発言した。信念の人ですよ、会ってみたいと思っっています。

藤井…偉いですよ。言えないことです。今度、参議院議員会長に立候補して負けましたね。

堀内…セミナーでもかならずノートをとっていて質問をしますね。ひとこと自分のまわりのことをいってから質問をする。

藤井…あれは参議院議員の中ではまっとうです。

尾崎…それでは、きょうはこのへんで。長い時間ありがとうございます。

堀内…本までいただいて。

藤井…いつでもきてくださいよ。本は半分ほど読んでください。



\* 民主党近現代史研究会を主宰して

「戦争のない社会を守りつづける政治・歴史に学ぶ政治」

藤井裕久 民主党名誉顧問に聞く Ⅱ

二〇一四年一月二一日

港区白金台の事務所にて

聞き手

尾崎美千生 元毎日新聞政治部副部長 高連協参与

堀内正範 朝日新聞社社友 「月刊丈風」編集人

**都知事選に細川立候補、高齢者へのアピールを期待**

政界の激動を前にした一昨年一〇月四日に、衆議院第一議員会館九一九室におたずねした。一二月一六日の総選挙で民主党は大敗、藤井先生は勇退されたため、昨年一月一八日には雪の残る細道をたどって白金台の事務所におたずねした。その後、民主党は七月二一日の参院選にも敗れた。この間にすぐれた見識をもつ高齢議員が多く引退し、「高齢社会」達成にとっては逆流となっている。

ふたつの国政選挙に勝った自民党は、安倍首相のもとで「脱デフレ脱却」のための「異次元の金融緩和」に着手し推進している。東京オリンピック招致の風を受けて飛距離をのばし、安倍首相は「一年一相」のK点を越えたものの、「消費税増税」を前にしたアベノミクス経済の陰り、歴史観による国際的孤立、そこに降ってわいた二〇一四年年初の「都知事選」への細川護熙元首相の立候補（「原発ゼロ」を掲げて小泉元首相の支援を受けて）。ここは藤井先生のご指南を受けるべく、昨年八月二三日以来、半年ぶりにお訪ねした。

### 都知事選を前にして

尾崎…ごぶさたしています。昨年の年初は雪で。

藤井…そのあとここでやったよね。わたしの会の前に。

堀内…はい。九月一六日の「叙勲受章祝賀会」の前、八月にお訪ねしました。民主党政権だったころ議員会館に、次が雪の白金台、そして前回はお祝いの会の前でした。会をやるからおさそいを受けましたが、後人として年代が違うというので。たしか当日は風雨がつよくなって。

藤井…お蔭さまで満員でした。マスコミ代表は海老ちゃん（海老沢勝二・元NHK会長）で、この年代が中心で、あと「初日の出の会」という現役の若い連中までできてくれました。ところで今日は何の。雑談でいいのでしょ。

尾崎…まずは都知事選のことで。

藤井…TVで話しましたよ。

尾崎…朝のTBSですね。

藤井…ええ。結論としては、ワンテーマはおかしい。でも「原発」をやってはいけないというのとはんでもない。経済政策だってやっていい。東京都民一三〇〇万人に対してはあたりまえ、という話がひとつ。それから細川については、「佐川」の話ですか、あれは野党として野中（広務）とか深谷（隆司）が予算委員会でやったこと。そんなことをやるとまた舛添（要一）は女の話になっちゃう。選挙がそんなものであるのはおかしいといいました。

尾崎…お相手はだれだったのですか。

藤井…片山善博。これはまっとうですよ。

尾崎…都知事選の候補ですが、先生は細川の担ぎ出しには。

藤井…関係していません。が、細川から電話がありました。応援してくれとは一言もいいません。どうということかという、野中に正確な話をさせてくれと言われました。正確な話つまり野中だってあんなのはウソだと思っただけです。下が何をやったかは知らないけれど、本人には関係なかったことは野中も深谷も知っています。わたしは大蔵大臣だったのですから。野中も深谷も自民党が野党だから予算委員会でがんがんやりましたよ。

尾崎…深谷というのは東京二区のこと。

藤井…佐川のことは野党の野中と深谷にやられたのです。当時からぼくは細川は知らないと見ています。この話をやると逆に舛添の女の話が出てきます。東京大学の教授会でやられたのですよ。当時の教授いま名誉教授をよく知っていますが、あの野郎はなんだと。片山さつきだけじゃない。そういうことは両方やめろと言っているのです。

堀内…そんな時期じゃない。

藤井…選挙になるとみんなそれなんです。「女かカネ」の話になる。なさけない。

尾崎…細川さんにも女の話が。

### 細川さんには癖がある

藤井…ありませんよ。ただ細川にはバカくさい癖があるのです。このほうが問題です。佐川のバカな問題で辞めることになった。「G七」でワシントンへいく直前に、辞めちゃダメですよ、こんなことで辞める必要はまったくない。支持率七〇%だった。いまの安倍よりはるかに高いのですから。「わかってます」というんです。ワシントンにいる間に「辞めた」ということになった。あの人の問題はそのことです。「権力に恬淡としすぎる」ということ。「恬淡としすぎる」のは権力者としてはいけないというのと、「あれがきれいでもいい」というふたつの評価に割れる。ほかの話はろくでもない話ですよ。

堀内…あそこで辞めるといふのは。

藤井…それはあなたの意見だ。実に恬淡としているという意見がある。七〇%の支持率があるのに辞めるといふのは権力者としてはおかしいという意見。そのどっちか。

尾崎…この前おたずねしたときに、「高齢化」の話がわかってもらえる人として、細川さんの名前が出た。そういうプランは。

藤井…あります。かれは日本新党ですから。勝手連かなにか知らないが、党の連中は支持すると思うよといいました。いまの尾崎さんの話ですが、これは野田しかいない。マスクミではあれこれいっていますが、日本のリーダーになりうるのは「これしかいない」と細川は明確にいいましたよ。これは意気投合しました。

堀内…野田さんは途中下車で、これからまた。

藤井…もちろんですよ。前に話したが、大平さんところの森田君、彼としては言いにくいけれど「絶対彼だ」といふ。解散のあとにも党を越えていっしょにやれるのは野田だといふ声はある。

堀内…いまの安倍政権は独善的すぎて、「靖国参拜」では菅官房長官からもいわれたりしている。

藤井…もう限界です。安倍は自民党でない、ネオナチです。自民党の先輩は泣いている。自民党はカネで悪いことをやったけれど平和は守ったというのが本流です。ぼくはもともと

と自民党ですから。

尾崎…細川さんの応援は。

藤井…担ぎ出しはやっておりませんが、応援はします。勝手連とか何とか、ひとりとして友達としてこれは多いですよ。

尾崎…近衛（文麿）さんのこともいわれていますが。母方のおじいさんでしょ。

藤井…ぼくは近衛は嫌いです。迎合主義ですよ。昭和の政治軍人に迎合した。昭和の政治軍人は悪のかたまり。テレビでもいいましたが、日本のためになると思って死んだ若い人々には尊崇の念を持っています。どうしてこいつらにお参りしなければいけないのか。昭和の政治軍人は絶対に許さん。二〇〇〇年の歴史にただ一回、許せないことをした。三〇〇何万人の無辜の民を殺したではないか。それに迎合した人物だと思っ嫌いです。尾崎…そうすると、こんどの相手方は舛添ですか。

藤井…そうでしょう。田母神（俊雄）なんてのも出ていますが。石原慎太郎が応援しているのはおかしいと思っています。「維新の会」も応援しないでしよう。それでもある程度の票は出ます。東條の孫娘（由布子）が何万票か出たでしょう。日本にも数%はいます。ドイツにはネオナチが一割はいます。しかしそれ以上は増えない。このグループはいます。堀内…それが見える選挙になりますね。

藤井…そうです。東條英機の孫娘と同じことになる。東條英機の息子（輝雄）は偉いです

よ。民間のYS―をつくった人ですから。

尾崎…あれは木村（秀政）さんではなかったですか。

藤井…木村さんは設計者でしょ。三菱重工の担当部長で折衝したことがあります。のち自動車にいきました。YS―という民間航空機をやった人で。おやじは悪いことをやったけれど、民間の経済をやった東條の息子は好きですよ。おやじは大嫌い。まわりでみんな死んでいるのですから。

堀内…安倍さんはそれをわかっていながら、やる。

藤井…わかっていてやるということは、安倍晋三という男は自民党でないということですよ。共産党から呼ばれたので行って話したことは、共産党の先輩も泣いているだろうが、自民党の尊敬する先輩も泣いている。あれはネオナチですよ、国家観が違います。ぼくとも自民党の先輩とも国家観が違います。

堀内…何が支えになつているのでしょいか。

藤井…それはじいさん（父方は安倍寛、母方は岸信介）とオフクロ（洋子）です。お話ししたと思いますが、おやじの安倍晋太郎は夜中に帰らなかつた。竹下（登）さんにならなければ家が嫌いなんだ、家庭の雰囲気。安倍晋太郎の親父は安倍寛でしょ。安倍寛は反東條ですよ。昭和一七年の翼賛選挙で、かれは反翼賛ですから。鳩山一郎とか河野一郎とか二階堂進とか大野伴睦とか。こういう連中のグループでしたから。全然違うのです。

尾崎…細川の相手の舛添はどうでしょう。自民党と公明党が支援している。

藤井…公明党はほんとにそうかな。舛添は安倍のことはいいませんからね。政策論からいうと福祉であり災害救済でありで。

堀内…乗りやすい。

藤井…たしかに乗りやすいのだと思います。ただし安倍については表に出るなら経済だけにしてくれと菅はいうと思います。

堀内…勝つか負けるかで大事な選挙になりましたですね。

藤井…大事な選挙ですよ。片山善博はこういうことをいいました。知事選は一自治体の選挙というが都知事選は違う。影響力の大きな選挙だから原発もいいし経済もいい。これはいわなかったけれど、ああいう歴史観と戦うことも必要。

堀内…細川さんは一月二二日に政策発表をするといっています。

藤井…逃げているといわれる。ワンパターンなんだね。そこが彼の欠陥です。一生懸命にやっているのでしょうけれど。災害救助、大島の問題とかそれなりにいわなければ。

堀内…オリンピックも。

藤井…オリンピックはどうでもいいですけど。全国の調査だとオリンピックのほうが原発より上となる。これは全国の調査だとNHKはしていました。東京都民の関心は一位に福祉でしょ、二位に原発で、そのあとの方にオリンピックです。



堀内…それをいわないと公平な報道でない。

尾崎…藤井先生のご意見は原発だけではなしに、いろいろやれと。

藤井…経済問題もそう。あんな金融政策ではかならずインフレになる。

尾崎…そのへんは細川さんは自信があるのですか。

藤井…まわりの者に言わせればいいのですよ。

尾崎…われわれは少子・高齢化をやっているのですが。

藤井…これは大事です。国内の経済を安定させるのは、少子・高齢化と雇用です。あんな三割しか払っていない法人税をまけるなんてとんでもない。いま尾崎さんたちがやっている少子・高齢化と雇用が国内市場を安定させる。「安定」といったのは公明党だけです。これはほめてやりたい。安倍もうちの党の者も景気のいいことばかりいう。いまは安定。

尾崎…少子・高齢化対策もこれまでの成長路線を安定化させるための道具になりませんか。

藤井…そのとおりです。

堀内…先生はどこかで「成熟社会」といっておられた。

藤井…それです。いまのやつは量より質というけれど。

尾崎…二〇六〇年には総人口が八六七四（やむなし）万人になるという。だからあんまり成長路線だけで考えてもいけない。

藤井…成長の根っこは安定ですね。安定なくして成長はありえない。おっしゃるとおり「成

熟社会」です。まだ「高度成長」をいつている。いまさら池田内閣になるつもりか。三〇〇時間のサービス超勤をやった。君、やるか。やれはしません。それではだめですよ。何百時間も超勤をやるような社会をつくってはいけません。それが少子・高齢化対策と雇用の安定だと言っているのです。

堀内…これは世界が見ていますね、日本が何をしようとしているか。

藤井…見ていますよ。すべて安倍はだめなんです。

尾崎…日本の適当な人口は、前提条件によって違いますが、少子化が進むことを頭に置いていかなければならないのですが。

藤井…戦前のように産んだらカネをやるというのではだめ。子どものことは自分の問題なんですよ。産んだらカネでなくて、社会が安定するかどうかを判断してもらえばいい。

堀内…それは少子化も高齢化も同じですね。

藤井…そうです。

尾崎…日本の人口は八〇〇〇万くらいでいいという学者がいる。

藤井…ぼくもそう思います。中国にGDPで負けたなんていうのはバカじゃないか、西ドイツに勝ったのが昭和四三年、そのころに日本の高度成長の力は限界を迎えていました。成熟社会へはいった。中国だっていずれ成熟社会へはいるのです。一三億と一億ですから。伸びが目立つのは当たり前です。

## 「平和な高齢社会」を争点に

尾崎…高齢化の問題はほかにはどうですか。

堀内…いまのお話の「成熟」ということばに籠められているのですが、安倍さんの演説をいろいろ聞いていて、女性と若い人の成長力しかいわない。高齢者三二〇〇万人の潜在力を使わなければ「成熟社会」なんかできるわけがない。そこをいわない。ヨーロッパの学者は見ている。いずれ化けの皮が剥がれるという人もいる。

藤井…そうだと思います。経験を大事にしない社会はだめだと思います。それは安倍という特殊な人間のせいだとわたしは言いますよ。

堀内…靖国はとくにそうですね。戦前の歴史から学ぶべきものを間違っている。

藤井…テレビでもいいましたが、それでも「靖国参拝」の支持率が落ちないのは、戦争を知らない二〇歳代の支持が高いのです。悪いヤツが合祀されていることがわからない。高齢世代はけっしてウンとはいっていない。片山善博も勉強させましょうといっていました。堀内…国連でも中国の国連大使は、戦争犯罪者を罰しない日本はこのままいくと同じ過ちをすると訴えている。これは欧米では説得力があります。長くなると、韓国の従軍慰安婦の像をあちこちに建てられる。

藤井…早く首にしないといけない。経済インフレのほうが早いでしょうが、歴史観の間違

っていることについても。今年中に下ろそうということ。円安インフレが見えています。バブルの影響が二〇年つづいて、またきまず。

堀内…もう見えていますね。こわいのはそういう状況が出てきたときに、どう混乱を回避するか、どう人災を避けるのかがわかっていない。

藤井…かならずそうなってしまう。バブルの継続になってしまいが、それはしようがない。国民が選んだのだから。それでもわたしは命がけで反対しますよ。

堀内…尾崎さんと話してきたのですが、都知事選で細川さんに「原発ゼロ」とともに「平和な長寿社会」の達成を訴えてほしいのですが、だれにいったらいいですか。

藤井…わかりません。が、おっさんにはその余力がありませんから回りから。田中秀征（選対）でもいいが、勝手連で若いヤツが出ていく。日本新党だから。その問題は細川がいちばん信頼している野田にやらせましょう。野田ひとりで行れるかどうかだけでも。

堀内…理解されれば高齢者都民の票の動きがきつと変わります。他候補には絶対いかない。尾崎…この前、千葉で野田さんの講演会があつて、藤井さんのところへお邪魔していますよといったら、先生にはずいぶんお世話になっていて、といっていました。

藤井…野田はいい、自民党のヤツでもそういう。いまの話はうかがいました。野田にいわせませす。「消費税」といわないで「少子・高齢者対策」。

堀内…ありがとうございます。高齢者が生き生き暮らしていける東京にしてほしい。

尾崎…細川さんの支援にはいろいろな支持者が声をあげる。梅原猛さんなんかも。

藤井…いますよ。文化は本人がやれる。

堀内…文化は大事。文化で理解しあえるのは、いまはフランスと日本くらいですが。

藤井…文化は野田にやらせなくとも、自分でやれる。野田にはいまのような「成熟社会」の話をいわせましょう。

堀内…それはぜひお願いいたします。

### 岩見隆夫記者が亡くなる

尾崎…先生、近現代史の話をしたいのですが。岩見（隆夫）さんが一月一八日に亡くなつて、尊敬していた先輩として残念で。切り抜きをもってきたのですが。

藤井…御社の先輩でしたね。

尾崎…二年ばかり先輩で。

堀内…そのことで、岩見さんが『サンデー毎日』に連載していた「岩見隆夫のサンデー時評」で書いていってくれた中に、「国会議員は低齢化しているぞ」というのがあります。衆議院四八〇人のうち、老・壮・青の比率を二・六・二が好ましいといい、いま全体で老二三人は少なすぎるといふ意見です。

藤井…老壮青ですな。いくつから老人というのですか。

堀内…七〇歳からです。一〇年前は六九人いた。二三人まで減らしてしまっただけは、しっかりした政治が成り立つわけではない。

藤井…若い人間、若い人間といった時代があるんですよ。

尾崎…中曽根さんと宮澤さんが辞めさせられた。

堀内…それが二〇〇三年です。岩見さんは「切り捨て事件」といっています。

藤井…事件といっていますか。

堀内…はい。事件です。おふたりともご不満でした。岩見さんは「政治テロ」とまでいっています。政界でこんなことをやっていると、「高齢社会」の構想ができるわけではない。

藤井…経験というのは要因として何物にも代えがたい。

堀内…あのころ対外的に持っていた宮澤さんの経験は、高齢を理由に年齢で切ってしまうものではない。

藤井…それは岩見さんのおっしゃるとおり。

堀内…そのとき最高齢の奥野（誠亮）さんは九〇歳。藤井さんも、石原さんだってやっとならぬで、及ばない。

藤井…お元気でおられる。

堀内…いまや行きすぎましたね。こういう方々がクオータ制でも二割はいないと正常とはいえない。女性もそうですが。今度の選挙では、藤井さんも含まれていますが、福田（康

夫)さん、武部(勤)さん、古賀(誠)さん、渡部(恒三)さん、森(喜朗)さん、止める側のヒトがいない。

尾崎…森さんは同じ年だから七六歳。

藤井…対談したときに森さんも同じことをいつていた。若い人からすれば早くいなくなれ。止めるヒトはいない。

堀内…新人が多すぎる。一八〇人。

藤井…小泉チルドレン、小沢ガールズ。ごろごろ入ってきたけれど、次には一〇〇人は落ちるよと森さんもいつていた。

尾崎…それは『サンデー毎日』ね。

堀内…『サンデー毎日』の「岩見隆夫のサンデー時評」。

藤井…岩見さんは病院でも書いておられた。

尾崎…藤井先生のところにも現われていましたか。

藤井…それはよく来てました。「産経新聞」に年末(一二月二七日付)に書きましたが、安倍首相の叔父さんの西村正雄・元興銀頭取が亡くなるまで政治姿勢を心配して、「市場原理主義者や偏狭なナショナリストと絶縁し、もっと経験を積むように」と伝えていたことが手紙に記されていました。前に首相になるときでしたが、岩見さんがこの手紙を「原文のまま」として引用したことがある。西村が死んですぐのことでしたが、岩見さんはどうど

うと書いてくれました。かれと呑んだときに、その手紙をみせろというんです。ここへ来ましたよ。朝の七時ころ。渡したら「原文のまま」で引用して書いてくれた。

尾崎…二階堂さんのオフレコ記事を一面に載せたことがある。あいつに書かれたらしようがない。

堀内…安倍さんは叔父にそこまでいわれても変わらない。

藤井…叔父として、そう書いてきているのですから、本人に言っていますよ。あいかわらず原理主義者。

尾崎…参議院の改革問題はどうなっていますか。

藤井…動きはあることはあるのだけれど、時間がかかりますね。もしそれができないのなら一院制にすべきでしょう。二院制を残すなら参議院は比例制、衆議院は小選挙区。ねじれを解消したなんていつているが、ねじれているからいい。当たり前で存在価値がある。

堀内…ねじれを解消できるだけの説得力、使いこなせる冷静な表現能力がない。そこで力勝負になる。

藤井…民主党もすぐに「問責決議案」を出す。自民党がまねをする。だから両方ともよくない。あれは程度を越しています。

堀内…もつとお互いに自在な表現力で、相手のふところの奥まではいつて議論をする。漫画世代の表現力では政治はできない。



藤井…なさけない話。

堀内…ひと昔まえまでは、政治家は一流の文化人たらしめた。文化人が政治の場に出てこない。

藤井…いいですね。ほとんど一年生議員ですから。若い人の表現力ではむり。

### 近現代史セミナーのこと

尾崎…歴史研究会のセミナーは。

藤井…臨時国会中でもやれとあったのです。海江田（万里）はやってくださいという。大畠（章宏）幹事長にもいいました。これは政調とは関係がない。八年前に岡田克也が言い出した。小泉（純一郎）首相の「靖国参拝」があつて、羽田（孜）が進めた。その後、『歴史をつくるもの（上・下）』（中央公論新社刊）を出して。今度また。

堀内…今度の本の『劇場型デモクラシーの超克』（中央公論新社刊）のタイトルがむずかしい。

藤井…前のも中央公論から出した。筒井（清忠）だってそこまで使っていない。

堀内…編集者はこういうタイトルを付けたがるけれど、「超克」では読者がひろがらない。

藤井…すみません。中央公論の記者に、「超克」なんておれは知らないし使わないといったら、識者は知っているという目で見られた。セミナーの責任者を玉木（雄一郎）にすると

いうので、これまでの三冊を読んでおくようにいつてあります。

堀内…三回目の加藤陽子さんの「歴史をどう使うか」では、国際的に孤立するな、冷静な世論をとという指摘が、昭和の歴史から学ぶこととしてありました。が、まだ終わっていません。

藤井…戦争とのかかわりでそこは大事です。加藤さんは、卒業の時期は避けたい、四月からやりますというから、二月からの国会に合わせて他の人でやります。

尾崎…NHK記者だった浅野勝人が特任講師として北京大学でお互いの「反目の連鎖を断とう」という講義をやった。一九二四年の孫文の神戸での講演などの話をした。王道か霸道か、それに関して日中関係の反目をどう克服するか。このあたりの話はおもしろい。

藤井…孫文の明治学院での演説の内容は重要ですし、浅野は知っています。議員になる前のNHK記者だったときから。ただ彼は自民党議員でしょう。どこもそうだけれど、政党の壁はある。どなたでも結構ですが登録はしてください、ということになっている。自民党の人がきても拒否はしませんよ。

尾崎…岩見さんがはじめた原始仏教から学ぶ「喜多さんの会」というのがあって、今回は亡くなって、送る会が中野サンプラザであるのですが。

藤井…そういう会なら出たいですが。岩見さんの本では満州での経験を書いた『敗戦』がいいですね。戦争は絶対にしてはいけない。が、やるなら勝て。当時はロスケといってい

ましたが、やったら勝たねばならない。負けた辛さを知っているんですね。岩見さんはおもしろい。おねえさんが絵を画いているいい本です。七八歳でしたか。もうすこし元気でいて欲しかった。

尾崎…岩見さんとは友人の別荘を借りたりして、家族ぐるみで。

藤井…それは前の奥さんですか。後の奥さんとの再婚式に呼ばれましたよ。ほんとの仲間だけを呼んでくれました。

### 戦争の記憶を話すこと

藤井…今度の本の話で渡辺（恒雄）さんのところへいったんですが、戦争の話になって、普通なら少佐になった人でしよう。中曾根さん、鳩山威一郎などはみんな少佐ですよ。それがいやだといって、徴兵で二等兵でいった。古参兵からお前はどこの大学だといわれて、東京大学だと思ったら、バーンとやられた。それを渡辺さんはいうんです。めちゃくちゃで、軍人は嫌いだという。田中角栄さんもそう。ディアナ・ダービンの写真を持っていただけで殴られる。殴ることでしか組織を守れない。なさけない。敵とはやれないで味方を殴るしかない。

堀内…あとは飢えて死んだ。これは戦争とはいえない。

藤井…下士官、古参兵が味方を殴る。これは戦争じゃない。戦後になってその古参兵と新

宿であった。お返しをさせてもらおうといって、バーンとやった。それからお前も食えていないようだからといってごちそうしてやった。友達がといっていました。本人でしょう。渡辺さんを嫌う人もいるけれど、おもしろい人です。ぼくはあの平和主義は好きですね。

堀内…日野原さんをはじめとして寂聴さんもそうですが、各地各界で高齢の方々がサミットをつくっていることは「平和の証」です。日本高齢社会の姿です。

藤井…渡辺さんもそうですが、戦争が終わったころの共産党の人も大事な人ですよ。

堀内…今度の本の細かいところですが、うかがいたいのは、藤井先生が「はじめに」を書いておられて、その末尾に「タイトル」についての説明が添えてあって、これは藤井さんの文脈をもっていないのですが。

藤井…そうでしたか、「はじめに」には戦争の経験談を書きました。B二九の話など。これに近いことを経験しているよと言われますが、言いたくないことでもあるのです。落ちた飛行機に食い物をかっぱらいにいったのですから。先生に、飛行機がおっこちたからあの中にあるビスケットを取りにいかしてください、といって。手がちぎれていたりしている。国では一般市民ですよ。兵隊の中に女性もいました。見てもへっちゃらで、ビスケットがあればいい。

尾崎…どこでしたか。

藤井…小平市。体当たりしたのです。特攻隊ではなくて、昭和二〇年二月、帝都防衛隊で

す。ぶつかって日本側も死んだ。飛行機はばらばらになった。胴体が割れて、ぷらぷらと落ちてきました。真上です。すぐそばですから、ビスケットがある。そういう発想しかできない。なさけない話。食料難、子どもにはそれが戦争です。

堀内…セミナーに出ていた江田（五月）さんが、「歴史を学ぶ」というのは、どこでどうすれば戦争をやめることができたかを知ることでしょうか、という質問をしていました。

藤井…戦争ははじまったらやめられない。いくところまでいってしまう。年号を覚えることではない。勉強会はやめませんよ。

堀内…いままさにその萌芽の気配がある。

藤井…それがわかっているのは年寄りだけです。

堀内…年寄りがそれを伝えなければ、若い人にはわかりようがない。

尾崎…細川さんを支えている小泉さんと先生はどんな。

藤井…同じ神奈川県民ですから。あの人は飲み会には絶対にこない。おもしろい人です。

ぶれることは嫌いな人です。小泉進次郎もあんならざるをえない。

尾崎…いろいろかがって、ありがとうございました。

堀内…また機会をみてお訪ねさせていただきます。

（『月刊丈風』二〇一四年二月号）